



「笑顔のママを笑顔のままで」

田島 ゆかり (幸手地区)

現在は、保健指導での出張開業をしております。子育て中の13年間は、ほぼ地域の一母親として過ごしました。だれも知り合いのいない幸手市での子育ては、何か不安で寂しく、毎日ベビーカーでうろうろしていました。誰かと何かで繋がりを持ちたいと思っていました。この時の思いが今の自分の原動力になっていると思います。

クッキングや手芸のイベントを5年前に公民館で始めました。子守ボランティアに任せて息抜きをされる方、子どもと一緒に楽しむ方等、毎回笑顔がいっぱいになりました。子どもを誉めるとママも笑顔になり、私自身が一番楽しんでいました。ところがコロナの影響の為公民館の使用が制限され、開催が困難になってしまいました。もやもやする中「だったら自前で場所を確保してしまおう」と後先考えず家を借りてしまいました。少人数ですが親子クッキング・ベビーマッサージ・ヨガ教室を行っています。また、人数制限により不安を抱えた家族から、訪問での両親学級を頼まれました。家族中で楽しみながら沐浴練習をしている姿に『やってよかった』と思いました。我慢が多く大変な中ですが、コロナがなければ家を借りることや訪問での両親学級をする事もありませんでした。コロナが新しい一步を踏み出させてくれたと思うことにして、これからもママの笑顔を応援していきたいと思っています。



令和3年度表彰受賞者の紹介

（※令和4年2月現在／受賞日順）

表 記 者	地 区	受 賞 名
渡 辺 セ イ	越 谷 地 区	埼玉県看護功労者知事表彰
丸 山 理 香 子	熊 谷 地 区	埼玉県看護功労者知事表彰
臼 倉 早 苗	川 口 地 区	日本助産師会会长長表彰
大 久 保 恵 子	鴻 巢 地 区	日本助産師会会长長表彰
平 野 素 尚	さいたま市地区	健やか親子21全国大会厚生労働大臣表彰
天 滿 屋 敷 千 幸	春 日 部 地 区	健やか親子21全国大会家族計画協会会长長表彰
竹 内 理 恵 子	幸 手 地 区	埼玉県公衆衛生事業功労者知事表彰
水 泽 幸 枝	朝 霞 地 区	母子衛生研究所母子保健奨励賞
横 井 聖 美	越 谷 地 区	母子衛生研究所母子保健奨励賞
増 子 麻 里	さいたま市地区	母子衛生研究所母子保健奨励賞

通常総会のご案内

令和4年5月14日(土) 10:00～
「Zoom」を使用したオンライン開催



一般社団法人

埼玉県助産師会会報



No. 50

2022.3.17
発行

～埼玉県助産師会の理念～

すべての生命を大切にし、
社会から信頼されるケアを行います



写真提供：牧岡晴美 助産師（越谷地区）

CONTENTS

- page
2 会長挨拶

3 部会活動報告
助産所部会 「助産師の志を繋いでいく」
保健指導部会 「これからの中産師に求められること」

4 勤務助産師部会
「勤務助産師部会員として経験したオンライン研修」

4 5 研修会報告

6 7 特集『つなぐ』
「埼玉県母体・新生児搬送コーディネーター事業」
発足から10年を迎えて

8 スポットライト「笑顔のママを笑顔のままで」
今年度の表彰者の紹介 通堂総会のご案内

会員数	353名
(2022.3.1現在)	
助産所部	51名
保健指導部	125名
勤務助産師部	174名
会員登録会員会	0名
会員登録会員会	3名

【新会員の募集】

助産師会の会員を随時募集しています。
ホームページをご覧ください。
TEL : 048-799-3614
E-mail : mw-saitama@royal.ocn.ne.jp
一般社団法人 埼玉県助産師会 事務局

会長挨拶

ごあいさつ



会長 牧岡 晴美

令和4年の年が開けました。一昨年からのC O V I D – 1 9 感染症が長引く中で、ワクチン接種が進み収束が期待されていたところに新たにオミクロン株が出現してきました。まだまだ感染対策や行動制限が求められる状況が続き、世界中の人々の日常生活や経済に大変な影響を及ぼしています。会員の皆様におかれましても、日々慎重に活動をされているかと思いますが、地域の母子保健の遂行のためにも、我々助産師自身、体調に気を付けて参りましょう。

現在、当会では県からの委託事業として、『思春期保健事業』、『不妊・不育・妊娠サポート事業』、『新型コロナウイルスに感染した妊産婦の寄り添い型支援事業』、『埼玉県母体・新生児搬送コーディネーター事業』等々がありますが、昨年より新たに2021年厚生労働省補助金事業として『不妊・不育症におけるピアソーター養成講座の広報啓発業務』が日本助産師会に委託され、北関東ブロックの代表地区として当会が選任されました。他県からの協力も頂きまして準備を進めているところです。1月よりプログラムが実施されますが、無事に役目を果たし期待に応えていけるようにと願っております。御協力を頂いています方々に深く感謝申し上げます。

また、昨年9月には、事務所としてお借りしていた貸主様より、築97年の老朽化に伴い解約通知をお受けしました。平成23年より10年間に及び大変お世話になりました、只々感謝でございます。それを受けまして、年末のお忙しい中ではありましたが、多岐にわたり皆様の御協力を頂きながら、事務作業や委託事業に支障ないようにと理事を中心として事務所移転の準備をしてまいりました。そして本年の1月9日、無事に南浦和の新事務所に移転の運びとなりました事を御報告させていただきます。今までのような恵まれたスペースはないませんが、より駅近で便利になったかと思います。

さて本年は、いよいよ埼玉県助産師会100周年を迎えることとなります。記念誌の発刊に向けて特別委員会により徐々に企画が進められております。諸先輩方の御努力の中に今の私達の助産師会があります。功績を振り返る貴重な機会となることでしょう。

新たな事務所からのスタート、そして埼玉県助産師会も100年目の節目の年として記念すべきスタートとなりました。一日でも早く平穏な日常に戻ることを願いつつ、本年も埼玉県助産師会一同、私達にしかできないことを、最善を尽くし、笑顔で努力邁進してまいりましょう。良き年となりますよう、会員の皆様の御健康と御活躍を祈念いたします。



部会活動報告

助産所部会報告

所沢地区 小杉山 佳代子

「助産師の志を繋いでいく」

コロナ禍におきまして、お力を尽くしている皆様に心から感謝いたします。私は部会運営委員として活動しております。助産所部会においても、妊産婦の緊急時の対応について情報収集や議論を行っておりますが、「本当に緊急時には自分が十分な感染対策をして妊産婦を一人にはしない」などの助産院院長たちの言葉を聞くと、強く優しい助産師魂を見る気がいたします。

私は、祖母が助産師という影響を受けて助産師を目指しました。祖母は60年以上助産師として勤め、40年ほど前からは地域の出産を担っているクリニックの唯一の助産師で、すべての出産に24時間体制。思い出すと信じられないような勤務体制でした。真夜中でも年末年始でもいつでもどこにいても呼び出されました。帰宅してくると「オールナイト～」などと言いながら愚痴の一つも言いませんでした。大正生まれの女性の強さでしょうか。戦争で夫を亡くして、その後子ども達を育て、朝ドラのヒロインのような人生もありました。年末年始で私たち孫が家に行ってもすぐにお産の呼び出し。家族としては寂しいなと少々不満感を持つこともありました。しかし、孫の私が、縁あって助産師になることができ、助産院というオンコール体制のある場所で勤務することになった今、元気な赤ちゃんが産まれた後の帰路は自分も少し興奮気味。疲れと安堵感と、産む女性の優しさと強さを思い出しながら幸福感でいっぱいです。祖母は昨年満100歳で他界し、孫として助産師として、お別れの言葉を皆の前で伝えてきました。

助産所部会ではいつも課題山積みで、w i t h コロナ、安全管理、嘱託医問題など話は尽きません。でもそこには強く優しい助産師魂をもつ助産師たちがいて、私も祖母を思い出しながら志を引き継いで、お役目を担っていけたらと思っております。



保健指導部会報告

草加地区 金子 弘恵

「これからの中産師に求められること」

保健指導部会会員の多くは新生児訪問に従事している。私もかれこれ15年程携わっているが、特に最近、育児状況の変化を感じる。

それは最近の新生児訪問では以前より父親に会うことが多くなっていることである。育児休業を取る父親は確実に増えているし、昨今のコロナ事情から祖父母の協力を得られず、父母のみで育児に臨む家庭もある。また、母親が先に職場に復帰し、父親が主たる養育者となった家族や、双子を育てるために父母二人が1年の育休を取得している家族にも出会った。しかし、父母二人で育児しているにもかかわらず、二人共が疲れ切っていたり、父のほうからの質問が多かったりする場面に遭遇することがある。父親が育児に参加することは誰もが賛成することではあるが、父親の育児休業が必ずしも育児不安の解消につながるわけではないと感じる。父親にとっても初めての育児なのに、訪問の対象は母子であり、産後うつ質問票も母のみに行い、記録に残るのは母の情報のみ。これでいいのだろうか？私たちは、今まで「母子」に焦点をあててきたが、これからは、「父母」に注目すべきではないか。父親が育児に参加するよう望み、社会も後押しする時代となった。今まで母親を手伝うのが父親の役割だったが、父は母と共に育児を担う人であり、母と同様にケアされる対象と考える必要がある。そのためには、助産師としての父親への援助は何が必要か考え、実践に生かしていくなければならない。

毎年、保健指導部会で開催している母子訪問指導者講習会も、昨今の育児状況を見極め、講習会の内容を考える必要があるだろう。「母子」という名称がついてはいるが、時代の変化に合わせ、「父母」又は「家族」を対象にした幅広い講義内容を企画しなければならないと思う。父と母の育児をサポートし、家族を支えていける助産師が今後は求められるのではないだろうか。



勤務助産師部会報告

さいたま市地区 山崎 千鶴

「勤務助産師部会として経験したオンライン研修会」

新型コロナウイルスの新たな変異種「オミクロン株」感染者が拡大し、終息の気配が見えない中、ご尽力いただいている皆様には大変感謝いたします。

私は、産婦人科病棟・外来に勤務し、総合周産期母子医療センターMFICUを経て、現在NICU・GCUで勤務しています。

周産期を取り巻く環境が変化し、病院での妊産婦や新生児の救急対応を通して、ハイリスク妊産婦や新生児の対応の変化や、異常分娩の増加を痛感させられる日々を送りながらも、院内助産での出産に安心感を得ながら勤務しています。

勤務助産師部会の活動では、埼玉県母体・新生児搬送コーディネーターとの協同で、オンラインでのスキルアップ研修会を企画・運営しました。研修名は「助産師に必要な臨床推論力」です。第1部「臨床推論総論」伊藤美栄先生には妊産婦の臨床推論の特性を、第2部「産科エマージェンシーエンジニアリング」望月礼子先生には産科母体急変時の事例からの推論を講義いただきました。研修会はZoomを使用し、オンラインで聴講できるだけでなく、リアルタイムに映像と音声で、全国の講師と参加した助産師がグループワークで交流し、即時に臨床に活かせる有意義な演習となりました。Zoom会議で周知方法、研修当日の役割分担、予算案、財務関係、企画案、公文書作成、チラシ作成、アンケート作成と集計、講師連絡、修了証作成・CLoCMiP®の準備、修了証・領収証メール配信など話し合いました。昨年に引き続き、部会長をはじめ、部会助産師、コーディネーターの皆様の結束があり、オンライン研修会を開催できました。埼玉県立大学のサテライトキャンパスでのライブ配信へのご支援も心強いサポートになりましたことに感謝いたします。勤務助産師部会研修会は自己研鑽できること、さらに自施設外の助産師との出会いや貴重な交流の場になります。今後多くの皆様の研修会へのご参加をお待ちしております。



研修会報告

思春期保健研修会 「令和3年度 思春期保健に関する研究会 第1回」

講演「学校で行われる包括的性教育、学校と外部講師の連携」

～社会が変われば性教育も変わる～

講師 埼玉県養護教諭会会長 山崎章子氏
埼玉県助産師会思春期事業担当 櫻井裕子氏



お二人の講師をお迎えして、令和3年8月4日(水)13:00~16:00

Zoomにより開催されました。

募集人数は100名でしたが、申込みが100名を超えて、急遽Zoom 増員の設定をするという思いがけない反響があり関心の高さを感じました。

第1部は、山崎講師から「養護教諭が外部講師に望むこと」、櫻井講師から「外部講師が学校に求められがちな事」について講演がありました。

性教育を全体の場で実施する場合、「人権・多様性・ジェンダー平等」について配慮する大切さを学び今後に活かすこと、「事前のアンケート調査から児童・生徒のニーズ把握し、その学校の養護教諭になる」ことの重要性を学びました。

第2部では、山崎講師と櫻井講師が埼玉県立浦和高校で行っている総合的な探求の時間（アドバイザリー・グループ）の実践について、ビデオ上映と講演がありました。

「性と生」は日々のコミュニケーションの積み重ねが前提として成り立っているものということを再確認し、過去の「性教育」が今では「人間教育」へと、時代と共に大きな変化が訪れていることも感じました。

講師お二人の「人間教育」への志の高さ、それを後輩に伝えようと自ら実践している姿に感動し、チャンスを見逃さないアンテナを高く、自らの思いや願いをどのように伝えたいのかを見つめ直し、実践できるようにしていきたいと思いました。

思春期保健事業主任 宮崎ゆき子

安全対策委員会研修会 「新しい生活様式における母子保健上のリスクと対応策について」

安全対策委員会では、臨床心理士・公認心理師の田熊喜代巳先生をお招きし、9月27日にオンライン形式で研修会を実施いたしました。新型コロナウイルスの影響により、母子保健領域においても対面ケアが困難な状況が続いているおり、母子の社会的孤立が新たな課題として浮上しております。そこで今回は、感染予防と母子ケアの両立の可能性について考えることを目的に研修会を企画いたしました。

講義の冒頭で、ある問題に向き合う際、適しているケアを検討するだけでなく、なぜその問題が生じているのかを考えることから始めることの重要性を共有いたしました。これはすべてのケアの場面においても通じるものであり、ケアという行為の根幹をなすものであると痛感しました。また、ケアを受ける母親たちにとって、時として根拠よりも安心感を得られることの方が重要な場面があることを教えていただきました。

講義後は、参加者の皆様からの活発なご意見により、いま求められている母子ケアのあり方をディスカッションすることができました。今後も委員会では、健康という多義的な概念のもとで参加者の皆様が有意義な時間を過ごせるような企画を考えてまいりたいと思います。

安全対策委員会 委員長 北田ひろ代



助産所部会研修会 「オキシトシンシステムを支える助産ケア～豊かなお産を目指して～」

令和3年10月16日助産所部会企画で、順天堂大学医療看護学部准教授の大田康江先生をお迎えし、「オキシトシンシステムを支える助産ケア～豊かなお産を目指して～」のオンライン研修会を開催いたしました。

コロナ禍のお産現場において感染対策や夫の立ち会いの制限など大きな影響がある中でも、助産師がオキシトシンシステムを理解したうえでお産に関わり、安全でかつ女性のボディティブな出産体験につなげることを目的に研修会を企画しました。

講師の大田先生は、出産後早期からの母子関係・愛着形成を促進させる育児支援に関するオキシトシンホルモンと母児間の絆行動との関連についての研究をされており、ミシェル・オダン氏のご翻訳等、多数の著書も出されております。

研修会では、女性には妊娠・出産を機に自ら生む力と、児とのつながりを高める機能が備わっていること、助産師は妊娠期・分娩期・産後の女性の精神状態および母子関係を良好な状態として維持していくように、妊娠初期からのオキシトシン分泌を促進させる関わりが大切であること、その具体的な助産ケアについてなど、客観的データ（分娩各期のオキシトシン分泌量は児頭発露時が最も高値であること等）をもとに分かりやすい説明を頂き、学び多き時間でした。

アンケート結果では、「今後に活かせそう」と回答された方が95.7%、自由記載欄への回答も82.6%と多く、コメント内容からも、参加者の皆さまのより高い助産ケアを目指そうという意欲が感じられた研修会でした。

高瀬洋子（朝霞地区）



スキルアップ研修会(勤務助産師部会/母体・新生児搬送コーディネーター協同)

「助産師に必要な臨床推論」～埼玉県母体・新生児搬送コーディネーター事後アンケートからの報告～

12月18日(土)にWeb(Zoomミーティング)を用いて、I部は岡山看護助産学校教育主事の伊藤美栄先生、II部は鹿児島大学救命救急医師の望月礼子先生を講師にお迎えして、勤務助産師部会、埼玉県母体・新生児搬送コーディネーター協同でスキルアップ研修会を開催しました。助産師として、母子へのケア提供にあたり臨床推論の3ステップである、適切な情報収集とその解釈、行動への決断を行っているか、振り返りと学びの機会となりました。

I部で助産師独自の視点を含んだ「臨床推論」の基本を学んだ上で、II部の応用編を受講後に、「腹痛」「頭痛」の2事例をグループワークで意見交換が出来た事は、理解度を深める事に繋がりました。搬送コーディネーターで実施した事後アンケートからも、系統的な情報の取り方、緊急性の考え方方が具体的に理解出来たという声が多く聞かれました。今後、臨床現場や搬送調整業務に活用出来る内容だったと思います。

搬送コーディネーターとして不慣れなWeb研修は、操作方法やグループワーク等で戸惑う点もありましたが、日本全国規模のエキスパートの講師を招いての研修は、Webならではのメリットであり、参加者も埼玉県内にとどまらず、県外からも数名の参加を得る事が出来ました。又、参加するにあたり都合がつきやすく、今後もWeb研修を望むという意見が多数ありました。

岸涼子（熊谷地区）

「つなぐ」

～安心できる出産を願い、日々支えています～

「埼玉県母体・新生児搬送コーディネーター事業」発足から10年を迎えて

埼玉県母体・新生児搬送コーディネーター

Q どのような事業ですか？

A 県内の妊産婦さんや生まれてすぐの赤ちゃんが、入院先の産科医療機関では対応できない状況になった時に、より高度な医療機関へ受け入れてもらうために病院をさがすお手伝いをする事業です。埼玉県が国庫補助を受けて平成23年10月に設置し、一般社団法人埼玉県医師会の受託運営により、埼玉県助産師会が再委託を受け、24時間365日、各勤務助産師1名が、調整業務にあたっています。まったく同じ出産はないように、切迫早産など同じ理由で依頼されても、その日の状況で調整の経過は異なり、臨機応変な対応が求められます。メンバーだけでは迷う場合、総合周産期母子医療センターや地域周産期母子医療センターの医師へ相談できます。業務内容は、開始から10年の間、埼玉県医師会の運営部会の先生方と埼玉県で話し合われ、私たちが業務を遂行しやすいように何度も改善していただきました。年3回、運営部会として話し合いの場が設けられています。



Q どのようなメンバーで構成されていますか？（必要な資格はありますか？）

A 現在の実働メンバーは20名です。専属ではなく、それぞれ助産所や病産院に勤務したり、地域で新生児訪問や産後ケア、母子健康手帳を発行する子育て世代包括支援センターに勤務したりと、様々な助産師がいます。年齢的には中堅から熟年層です。普段は直接妊産婦さんや赤ちゃんと対面しますが、搬送調整では電話と病状や経過の書かれた「搬送調整依頼書」のFAX送受という非対面のコミュニケーションで業務展開しています。

出産現場を3年程度経験していることと、埼玉県助産師会会員であることが入職の条件です。電話とFAXで依頼を受けて搬送先をさがす調整業務は事務的に見えるかもしれません、会の理念や基本方針を理解して、地域のつながりを大切に、安心して子育てができる社会づくりを念頭に仕事をしています。



Q コーディネーターとして難しいと感じたこと、嬉しかったことは何ですか？

A 調整にかかる時間が短くスムーズに受け入れ先が決まると嬉しいと感じるのはメンバー共通です。直接患者さんを目にしていないので、書面からの情報をもとに伝えることが難しい時もあります。無事受け入れ先が決まつても、その後患者さんがどうなったかの情報はなく、適切な調整だったのか評価できないことも、業務が難しいと感じる理由の一つです。

新生児訪問や産後ケアで、たまたま搬送システムを利用された母子と会えることがあります、良いフィードバックをいただいた気持ちになります。

Q コーディネーターとして心がけていることは何ですか？

A 埼玉県や埼玉県医師会の業務マニュアルをもとに、調整業務の行動マニュアルを独自に作成しています。依頼内容を的確に把握して、病状や緊急度にあった病院へ受け入れをお願いしていますが、多くのメンバーが「冷静に」「落ち着いて」と自分自身に言い聞かせているようです。やり取りは電話だけなので、聞き取りやすい言葉遣い・音声ですべての関係者に心地よく対応していただけるような接遇も心掛けています。

Q コーディネーターとしての取り組みについて教えて下さい

A 事業開設当初、スムーズな搬送業務のために、主任を中心としてマニュアルが作成されました。当時は、東京都内への搬送が多く情報伝達が重要な課題でしたが、いろいろな搬送事例を通してメンバーの意見が取り入れられ、マニュアルが改善されています。最近ではCOVID-19に関する対応や、戻り搬送（県内や東京都へ搬送された妊産婦さんや赤ちゃんが埼玉県内の元の病院へ戻るための搬送調整）の更新をしました。

私たちのスキルアップを目的に、毎年1回の研修会を開催しています。電話という非対面式コミュニケーションの円滑な手法を接遇の講師から学んだり、産科疾患・治療法等を学んだりして、円滑なコーディネートができるよう努めています。

年3回の事例検討会は、担当者持ち回りで1回2事例程度を行っています。調整した事例の疾患を学習したり、調整の過程について意見交換したりします。担当者が発表することで、調整依頼書や報告書だけでは読み取れない『調整の課題』を共有・検討して、調整業務に活用することが目的です。

Q コーディネーター事業からのメッセージをお願いします

A 埼玉県では、母子が安全・安心に出産できるような体制が整えられています。埼玉県内で働く助産師さん、搬送コーディネーター事業に関わり、これまでの助産実践経験を埼玉県の周産期医療へ一緒に役立てませんか？

運営母体の埼玉県医師会や総合・地域母子医療センターや新生児センター、県内産科医療機関のみなさまには、搬送コーディネーターシステムをもっと活用していただきたいと思います。多くの方に助産師を活用していただけることを願っています。

埼玉県の周産期医療へ貢献のために
ぜひご一緒に働きませんか？！



取材後記

搬送調整依頼のFAX受信から、搬送先を決定し調整完了まで約30分。この間、依頼元と搬送先へ10件以上の電話調整作業が行われていました。落ち着いた聞き取りやすいトーンで、短時間に要点を伝えるコーディネーターの姿は、まさに神業と感じました。

当日の受け入れ状況や交通情報など、いかに安全に早く搬送ができるか、常に準備。勤務交替時の引き継ぎで必ず情報共有していること、研修会や事例検討などスタッフ間での連携がなされていること、助産師として様々なフィールドで活動していることを活かし、搬送される妊産婦や新生児、家族のその後までも考えながら搬送調整していることに感動しました。

立ち上げから10年、命を、医療機関を、多職種を、チームを『つなぐ』活動を続けられてこられたことに、同じ助産師会会員として誇らしく感じます。埼玉県の周産期医療に貢献している活動に感謝し、今後も注目していきたいと感じる時間でした。

（広報委員 西島・土井）